



2014 年度
アンコール遺跡整備公団
インターンシップ報告書

金 沢 大 学

アンコール遺跡整備公団インターンシップ実施委員会

2015 年 1 月





写真 1. 業務の最終日にアンコール遺跡整備公団水管理部門前にて（後列左から、伊藤圭吾、板垣政孝、外内都萌、櫻井香奈、笠井賀織、長谷川美華、堀佐菜子、前列左から、河本麻実、千種麻莉）。



写真 2. 業務初日の公団担当職員との顔合わせとハン・プウ副総裁によるカンボジアの歴史やアンコール世界遺産についてのレクチャー。

写真 3. 業務地へは担当職員とともにバイクで移動。

写真 4. 業務終了後は担当職員の指導を受けながらその日の報告書をまとめる（グループ 2）。





写真1. 北バライの観光用プラットフォームの視察 (グループ1, 2, 3).

写真2. ルン・タ・エク・エコビレッジでの農作物調査 (グループ1).

写真3, 4. プラカーン遺跡の建築様式などを学ぶ (グループ1, 2, 3).

写真5. ルン・タ・エク・エコビレッジでの住民生活状況の視察 (グループ1).

写真6. 修復中の西メボン遺跡で担当職員の説明を聞く (全グループ).

写真7. クメール民族文化センターで責任者の説明を聞く (全グループ).



写真1. 最終日に行われた受入責任者のハン・プウ総裁との面談（グループ3）.

写真2. 最終日に開催されたインターンシップ5周年記念植樹（グループ2）.

写真3. 記念植樹を終えての記念写真.

写真4, 5, 6. 最終日のバーベキューパーティ. お世話になった公団職員のみなさんとの記念写真（写真4：グループ1, 2, 3, 写真5：チューター, 写真6：グループ4）.



学生たちの業務地（グループ1：ルン・タ・エク，グループ2：社会基盤整備，グループ3：北バライ，グループ4：西バライ）

2014 年度アンコール遺跡整備公団インターンシップ報告書

目 次

1. はじめに	加藤和夫	・・・	1
2. インターンシップの成果と今後の課題	塚脇真二・Hang P.		2
3. 参加学生たちの報告			
1) 初めてのカンボジア	河本麻実	・・・	7
2) カンボジアでの 2 週間を終えて	千種麻莉	・・・	11
3) カンボジアでの 2 週間	堀佐菜子	・・・	14
4) 念願のカンボジア	櫻井香奈	・・・	18
5) カンボジアでの経験	長谷川美華	・・・	22
6) 私の見たカンボジア	外内都萌	・・・	26
7) アンコール遺跡整備公団インターンシップ報告	伊藤圭吾	・・・	30
8) アンコールインターンシップに参加して	板垣政孝	・・・	34
4. チューターの報告			
2 度目のカンボジア	笠井賀織	・・・	39
5. 埼玉大学の海外フィールド実習報告			
1) 金沢大学のインターンシップと埼玉大学のフィールド実習	荒木祐二	・・・	43
2) 海外フィールド実習に参加して	大山央人	・・・	46
6. 資 料：2014 年度アンコール遺跡整備公団インターンシップの概要		・・・	48

図版 1：インターンシップの参加学生たち。

図版 2：インターンシップでの現場業務のようす。

図版 3：インターンシップ最終日の記念植樹とバーベキューパーティ。

図版 4：アンコール遺跡世界遺産公園での各グループの業務地。

1. はじめに

金沢大学人間社会学域国際学類長 加藤和夫

平成 22 年度から毎年実施されている「金沢大学／アンコール遺跡整備公団インターンシップ」が、今年度も 8 月 23 日から 9 月 7 日までの 16 日間のスケジュールで実施されました。早いもので今回が 5 回目となりました。今年度も昨年度と同様、8 名の学生+チューター 1 名の 9 名が参加しました。その内訳は、国際学類から昨年度も参加したチューターを含めて 4 名、ほかに人間社会学域の人文学類、法学類、経済学類、理工学域の物質化学類、環境デザイン学類の 5 学類から各 1 名が参加しました。今回は男子学生が 2 名参加したことも特筆すべきことでした。

また、今年度は、当プログラムが在カンボジア日本国大使館による日カンボジア絆増進事業として認定されたことも嬉しいニュースでした。カンボジアでは唯一とも言える学生のインターンシップとして、学生と公団職員との双方向の交流という点が高く評価されての認定と伺いました。

昨年度から、環日本海域環境研究センターと国際学類との共同開催として新たなスタートを切った当プログラムは、これまで同様、環日本海域環境研究センターの塚脇真二教授の多大なご尽力によって大きな事故もなく、無事に実施することができました。塚脇教授には、今回も PR 活動や公団との折衝を含む諸準備、参加学生の選考と情報交換会の開催、緊急連絡網の作成や学内のさまざまな組織との交渉、カンボジア国内諸機関との連絡など、諸事万般にわたってお世話になりました。また、インターンシップ中は、現地で参加学生のサポートに細心の注意を払っていただくとともに、毎日多くの写真とともに詳細なレポートをメールで頂戴し、共同開催の学類長として大変心強くありがたいことでした。また、今回、昨年経験者でチューターとして同行してくれた国際学類 4 年生笠井賀織さんにも感謝します。貴女の経験と配慮が参加学生にとって大きな支えとなったに違いありません。そして、今回も快く本学学生を受け入れてくださり、優しく接して指導をしていただいたアンコール遺跡整備公団職員の皆様にも心から感謝申し上げたいと思います。

10 月 28 日に開催された報告会での参加学生たちの報告を聞きながら、このプログラムが、世界でも稀な、人の暮らす世界遺産での海外インターンシップとして、参加学生たちにとって貴重な体験となっていることが確信できました。今年度、文部科学省の「スーパーグローバル大学創成支援事業」に採択されたことで、本学はより一層グローバル化への努力が期待されることとなります。当プログラムが金沢大学のグローバル化推進の一翼を担うものとして来年度以降も継続されることを願って、ご挨拶とします。

2. インターンシップの成果と今後の課題

環日本海域環境研究センター・教授 塚脇真二
アンコール遺跡整備公団・副総裁 Hang Peou

2010 年度に始まったカンボジアのアンコール遺跡整備公団（略称：アプサラ公団）での学生インターンシップも今年度で 5 回目を迎えることができた。昨年 9 月に同公団本部が遠地へ移転したため、公団本部への日々の通勤や本部から業務地への移動などに想定以上の苦労があったが、公団職員たちの手厚い

指導と保護のもと、学生たちの積極的ながらも節度ある行動もあってすべての予定を無事に終えることができた（写真 1）。同公団 Bun Narith 総裁ならびに Khuon Khun-Neary 副総裁，および同公団関係諸氏に心からの謝意をまず表したい。また，このたびのインターンシップの実施にあたって，在カンボジア日本国大使館には平成 26 年度日カンボジア絆増進事業に認定いただくとともに，大塚菜生専門調査員にはインターンシップの実施状況の現地視察にお越しいただいた（写真 2）。金沢大学国際学類加藤和夫学類長，同環日本海域環境研究センター早川和一センター長ほか関係諸氏にはさまざまな支援をたまわった。ここにあわせ感謝の意を表する。

今年度の参加学生は，国際学類 2 年生 2 名，同学類 3 年生 1 名，人文学類 3 年生 1 名，法学類 3 年生 1 名，経済学類 2 年生 1 名，そして物質化学類と環境デザイン学類の 3 年生各 1 名の計 8 名である。ひさしぶ

りに男子学生 2 名の参加を得た。学生たちは例年どおり 2 名ずつの 4 グループに分かれ 2 週間をとおして業務に従事した（図版 2）。今年度の参加学生たちも，現地での協調性や積極性，社交性などのすべてにわたって申し分のない学生たちだった。なお，参加学生のうちの 5 名は日本学生支援機構の平成 26 年度海外留学支援制度の助成金 7 万円を受け取っている。これによって学生たちの経済的負担を約半分に減らすことができた。なお，このインターンシップの企画から参加学生の募集や選別，そして実施にいたるまでの日程などは



写真 1. 公団での業務初日に



写真 2. 日本国大使館の大塚さんをかこんで

巻末の資料を参考されたい。

昨年度のインターンシップに参加した国際学類4年の笠井賀織が今年度はチューターとして参加学生に同行した(写真3)。現地での生活や公団での業務にかかる参加学生たちの相談相手、学生たちと公団との間に入っての連絡や時間調整、学生たちの安全管理の補助と多岐にわたるチューター業務であったが彼女はこれらを的確にこなしてくれた。また、今回もこのインターンシップ期間に合わせて埼玉大学教育学部の荒木祐二准教授が同大学の海外フィールド実習を実施している。



写真3. チューターによる始業点検

今年度のインターンシップで注目されることは、参加学生8名ながらも学生たちの所属学類は6学類にもおよび学類構成の多様性がさらに増したことである。ただし、巻末の資料には掲載していないが、第2回から第4回までのこのインターンシップでは、応募者20名前後と競争率が2.5倍程度もあったのに対し、今回の応募者は10名と例年に比べてほぼ半減している。しかしながら、前回につづいての参加学生の学類構成の多様化にはさまざまなよい相乗効果や波及効果があった。学生たち個々の多様な興味が他の学生の関心を引き、それが連鎖的に広がっていくという傾向が随所で見られた。

昨年度につづいて埼玉大学の海外フィールド実習と合同で実施できたことは、本学のインターンシップの将来にとっても明るい材料としたい。引率の荒木准教授はカンボジア情勢に習熟した研究者である。海外インターンシップと海外フィールド実習とは活動内容は異なるものの、現地での活動の一部を重複させることで学生たちの安全管理体制をより堅固なものにすることができた。また、大学の垣根を越えた学生たちの交流には前述の学類構成の多様化と同様の効果を見ることができた(写真4)。



写真4. 埼玉大学グループをかこんで

今回のインターンシップは、天候に恵まれなかったことも特筆すべきことかもしれない。実施期間がカンボジアの雨季であるとはいえ、期間中をとおして雨が降らなかったのはわずかに1日だけだった。そのせいもあってか、発熱や腹痛といった体調不良のため業務を休まざるを得なかった学生がいたが、幸いにも大事にいたることなくすぐに回復してくれた。また、学生たちが滞在するホテルでの盗難事件も発生したが、現地観光警察やアプサ

ラ公団関係者の尽力によってすみやかに解決することができた。インターンシップ期間中の学生たちの活動については学生たちの報告書をご覧ください。

インターンシップ期間の中日の休日にはアプサラ公団水資源部門設立 10 周年記念とこのインターンシップの実施 5 周年記念の合同パーティを開催した。また、インターンシップ最終日には、5 周年を記念しての植樹祭を公団本部で実施し、ひきつづいてバーベキューパーティを公団側で開催していただいた。いずれも参加学生たちにとっては忘れえない思い出になったことと思う（図版 3）。

このインターンシップの成果は例年と同様、以下の 3 点に集約される。学生たちへの「教育効果」、成果の「現地への還元」、そして本学の国際貢献にかかる「周知（宣伝）」である。これまでの報告書とほぼ同じ内容になるが以下に記述する。

（1）学生たちが大きな満足と大きな経験とを確実に持ち帰ることができた（教育効果）。華やかに喧伝されるばかりの世界遺産であるが、その維持管理や観光客の便宜のためにどれほどの労力とその裏側で費やされているかを公団での業務をとおして参加学生たちは実体験することができた。また、昨今のはやりの言葉である「持続可能」のために、さまざまな苦労がその背後あることを経験した。「最初のイメージとはおおきく違っていた」とは今年も学生の口からもれていた感想である。これとともに「貧しい発展途上国」というイメージが先行するカンボジアのくったくのない人々や豊かな自然に学生たちは日々触れることもでき、さらには国際協力の舞台であるとともに地域住民が暮らす世界遺産公園の特異性を目の当たりにした（写真 5）。「国際貢献」と「地域社会」というふたつのキーワードを学生たちは実体験したことになる。学生たちの報告にはこの 2 週間の体験が生き生きとつづられている。したがって、このインターンシップでの 2 週間は学生たちにとってきわめて充実したものだったと客観的に評価されよう。これはこのインターンシップの実施が学生たちへもたらした大きな教育効果といえる。



写真 5. 世界遺産公園内の家庭を訪問



写真 6. 公団職員との業務後の意見交換

（2）学生たちを指導することによって公団職員に大きな教育効果をもたらした（現地への成果の還元）。参加学生たちはそれぞれの

業務の担当職員たちとともに公団の通常業務に従事した。公団本部が遠地に移転したため、学生たちの同行が例年以上に彼らの業務の支障になった点は否定できないが、インターンシップ終了後に公団上層部から、学生たちの存在が職員たちに大きな教育効果をもたらしたことを例年と同様に感謝の意とともに指摘された。具体的には、1) 学生たちを案内することで職員たちの「説明」の技術が向上したこと、2) 職員たちが説明する「楽しみ」や「喜び」を味わったこと、3) 業務についての全般的なことを学生たちに説明することで、職員たち自身が業務内容を総括することができたこと、である（写真6）。

（3）学生たちの活動がアンコール世界遺産公園で大きな話題となった（宣伝効果）。安全管理の観点から、参加学生たちはアプサラ公団の制服を着用して日常の業務に従事したが、カンボジアではエリート集団として知られる同公団の制服を日本人の学生たちが着用するのはきわめて目立つものであり、現地の人々や日本語観光ガイドたち、彼らが案内する日本人観光客におおいに注目された。参加学生たちが制服にアプサラ公団のロゴとともに本学のロゴをつけて業務にのぞんだことも効果的だった。また、日カンボジア絆推進事業のロゴマーク（写真7）を入れたシャツを作成し、参加学生や公団職員らが休日や業務後に着用もした（図版3）。したがって、このインターンシップは世界遺産における本学ならびにわが国の国際的な貢献活動として一定の宣伝効果をあげたといえよう。

アプサラ公団での海外インターンシップを将来にわたって継続するための基礎と実績は十分に確立できている。これを長期的に継続するための懸案のひとつであった他大学との合同での実施についても、埼玉大学の海外フィールド実習との2年連続しての合同開催によって展望が開けてきた。人的あるいは経済的な継続的支援体制の確立については問題がまだまだ残されているが、これはさらに時間をかけながら解決するしかないかと考えている。



写真7. 日カンボジア絆推進事業ロゴ

3. 参加学生たちの報告

1) 初めてのカンボジア

理工学域環境デザイン学類 3 年 河本麻実 (グループ 1)

アンコール遺跡群での業務を通して、学校の授業では得られないものを吸収し、学校ではできないことを経験したい、世界遺産であるアンコール遺跡や自然はいつか自分の目で見てみたい、と思いこのインターンシップに応募しました。たくさんのことを見聞きし、経験して成長してこようと意気込んで参加したインターンシップでしたが、毎日がとても新鮮で刺激的で、想像以上にたくさんのことを経験し、学び、考えた 2 週間となりました。

初めての東南アジアということで、衛生面や治安、英語がちゃんと使えるかなど不安な点もありましたが、アンコール遺跡や非日常的な生活をとても楽しみにしていました。飛行機からシェムリアップに降り立った瞬間から屋根が特徴的な空港の建物やトゥクトゥク、飛び交うクメール語などすべてが新鮮で、特に星がとても綺麗に見えたのには感動しました。初日は現地で使う携帯電話を買いに行ったり、遺跡を訪れたり、シェムリアップ市内のどいたいの雰囲気味わいました。最も印象的だったのは、アンコール地域が広大であることです。日本でカンボジアというとアンコール・ワット、アンコール・トムという言葉をよく耳にしますが、それだけでなく、100 以上ある寺院や 112 の村、バライ（人工貯水池）などを含めた地域全体が世界遺産として維持管理されており、山手線の内側ほどの面積を持っています。

業務の初日はプウ副総裁の講義を受けて APSARA 公団やアンコール遺跡の歴史について教わり、グループで担当ごとに分かれました。私はルン・タ・エク・エコビレッジを担当することになりましたが、グループごとに動くことがあまりなく、北バライや西バライについても幅広く関わることができました。

ルン・タ・エク・エコビレッジは新しい村で、アンコール地域における 13 万の人々の生活による大気や水の汚染から遺跡を守るため、増大した人口を調整することを目的として設立されました。政府が無償で家と農地を提供し、まず 100 世帯が移住し、現在は 230 世帯が暮らしています (写真 1)。村の中心には大きな風車と池があり、区画が整備されているので家が整って配置されています。中にはフランスの企業が観光で提供するホーム



写真 1. ルン・タ・エク・エコビレッジ

ステイ用の家もありました。風車は中心に位置し、大きいのでランドマークのような存在感がありました。風を使って地下水をくみ上げて生活用水として住民に提供するために設

置されましたが、風車が家から離れていて水を運ぶのに不便なので、実際は各家庭に設置されている井戸を使用して生活しています。ルン・タ・エク村の面積は 1012 ha で、そのうち農地は 210 ha です。よって、1 世帯当たり約 0.9 ha の農地が政府から提供されていますが、不十分だそうです。

わたしたちが最も時間をかけて議論したのは、ルン・タ・エク村をどのようにして発展させていくかということです。長所と短所を整理し、アイデアを提案しました。気持ちの良い風景で暮らしやすそうに感じましたが、住民の村内での仕事は農業しかなく、市街地から離れているうえ、道路が整備されていないので出勤が困難であるという問題点があるそうです。たしかに、アンコール地域内の村に比べて人が少



写真 2. 赤茶色の土のままの道路

なく閑散としていた印象がありました。アンコール地域内からルン・タ・エク村に向かう時に通行した道路はアスファルトではなく、赤茶色の土のままで雨上がりだと足元がぬかるんでいる状態でした（写真 2）。ホームステイ用の家もあることで、住民の不便を解消するとともに、観光地として発展させるために道路は整備すべきだと提案しました。すると、道路は 1 度整備したことがあると教えてくれました。しかし、道路を建設したことによってバイクだけではなく大きなトラックの交通量も増えたため、道路が耐えられず壊れてしまったそうです。何回も整備し直すことで、かえってコストがかかったり、工事期間はその道路が使用できなかつたりするため、道路に限らず構造物は少しコストがかかっても丈夫で長持ちするものを造るべきだと思いました。しかし、かつて国内で戦争があったためにカンボジア人は知識と技術不足でお金をかけることが出来ませんでした。1993 年には内戦が落ち着き、1995 年に APSARA 公団が設立されたものの、すべきことや問題がたくさんありすぎて手が回らないとおっしゃっていました。

ルン・タ・エク村でひとりの娘の子守をしている女性と出会いました。話を聞いていると、彼女の夫は村に仕事がなく、市内まで出るのも困難なのでタイに出稼ぎに行っているとおっしゃっていました。せっかく新しい村の新しい家なのに、家族全員で暮らすことができないのは悲しく感じました。村には学校があるので子供は問題なく生活できますが、仕事がないのは問題だと思いました。そこで、マーケットを村につくることを提案しました。マーケットがあれば、買い物のために市内に出かける必要はなくなるし、住民の働く場所にもなると考えました。観光客が訪れた時も観光スポットとしてアピールできます。しかし、マーケットが成り立つほど村の人口は多くなく、実際には機能しないというのが現状です。

このようにルン・タ・エク村は新しい村だからこそその課題がたくさんあります。しかし、

APSARA 公団はルン・タ・エク村だけでなくアンコール地域全体を維持管理していく必要があります。他にもアンコール地域における環境問題や渋滞問題などを議論しましたが、ひとことでは言い切れない複雑な問題でした。もっとディスカッションしたいと思いました。もっと英語を聞き取る力があつたら、自分の意思を伝えられる語彙力があつたらと思います、とても悔しかったです。最初はコミュニケーションをとるのに英語が得意なグループのメンバーに頼っていましたが、自分で言ってみたら伝わるがあつてその時に大きな喜びを感じました。少しずつ自分の言葉で伝えられるよう努力したところ、スタッフの皆さんは一生懸命聴こうとしてくれて嬉しかったです。私も聞き取れなかったことや分からなかったことは必ず理解するまで質問しました。英語が得意でなくても伝えようとする姿勢をとることで、伝え合うことの喜びを知りました。しかし、時間がかかってしまうので、英語の勉強は必要だと実感しました。

業務のある平日は、おもにスタッフのモーターバイクの後ろに乗せてもらって移動し、遺跡では話や歴史を、水門ではアンコール地域内の水の循環について教わりました。事務所でのディスカッションでは、現場で教わったことを復習したり、意見を述べたりしました。初めはバライという言葉すら知りませんでした。寺院の名前、誰がいつ作ったか、どんな背景だったのかなどすぐに説明できるようになりました。日が経つにつれて難しかった神話も分かるようになり、水の機能もどんどん詳しくなっているのを実感できて嬉しかったです。スタッフの皆さんは業務中とても真剣に仕事をしていて丁寧に指導していただきましたが、お昼休憩や業務が終わるとハンモックで休憩したり、いろんな話をしたり、切り替えが上手だと思いました。業務ではたくさんのが学べて楽しかったけれど、家族の話の話を聞いたり、クメール語を教えてもらったりするのも楽しみでした。

業務が終わると、スタッフの皆さんとよくバレーボールをしました。街にはいたる所にバレーボールコートがたくさんあつて多くの方がバレーボールを楽しんでいました。とても上手でブロックを跳んだりバックアタックを打ったり本格的でしたが、トスを上げてくれてスパイクを打つ時名前を呼んでくれたり、決まったら褒めてくれたりして嬉しかったです。言葉が通じなくても、一緒のコートでボールを繋いでプレイすることで普段業務では関わらないスタッフの方たちとも距離が縮まったかなと思いました。

バレーボールをしない日には孤児院を訪れたり、ショッピングをしたり、夕日を見に行ったりしました。日本で購入した遊び道具を持って孤児院を訪れましたが、子供たちの英語の堪能さと歌ってくれた日本語の歌に感動しました。孤児と感じさせないほどパワフルで思いやりのある素直な子供たちでした。と同時に、勉強にも遊びにも一生懸命な彼らがこれからのカンボジアを担っていくと思うと楽しみになりました。暗くなるまで時間を忘れて遊んで素敵な時間を過ごすことができました。また、1日の終わりには必ずといっていいほどナイトマーケットでショッピングを楽しみました。だんだん値切るのも慣れてきて、ナイトマーケットで買ったものを着て毎日過ごしていました。

来る前は少し心配していた食事については、パブストリートなど観光客向けのところで

食べていたこともあり口に合ってどれも美味しかったです。カンボジアの郷土料理だけでなく、中華料理、インドカレー、パスタ、鍋、フォーなど各国の料理店があって、毎日飽きませんでした。休日に訪れたアプサラダンスを見ながらのビュッフェはとても印象的です。トロピカルフルーツは絶品で毎日シェイクかスムージーを飲んでいました。カンボジアの肉料理であるロックラックが特に気に入り、炒飯もとても美味しくてお昼ご飯を中心にほぼ1日1回は食べていました。その中でもルン・タ・エク村のピサイさんの家で食べた炒飯は忘れられません（写真3）。また、甘いものも豊富でホテルの近くにあるラッキーモールというスーパーや、ブルーパンプキンのアイスクリーム、ソッカホテルのチーズケーキとスムージーもお気に入りです。



写真3. ルン・タ・エク村で食べた炒飯

休みの日は東南アジア最大の湖であるトンレサップ湖や最も美しい遺跡であるバンテアスレイ寺院に訪れました。トンレサップ湖ではボートから水上住宅を間近で見て、人々の生活を垣間見ることができました。子供たちもボートに乗って遅く移動している姿が印象的でした。また、アンコール・トムで念願の象に乗れたことがとても嬉しかったです。象に乗ってバイオンを1周しました。象の背中から見たバイオンはいつもと違って新鮮で、東南アジアらしい経験ができました。私の個人的な希望を受け入れてくれた塚脇先生に感謝です（写真4）。



写真4. アンコール・トムでゾウに乗る

2週間、毎日新しい発見があり、いろいろな出来事がありました。APSARA 公団のスタッフをはじめ、ホテルのスタッフ、マーケットの店員さん、トゥクトゥクの運転手、そして毎日私たちを送迎してくれたペンさん、カンボジアで出会った人たちはあたたかく、カンボジアという国がとても近くに感じました。みんなで植えた木が成長した頃に、私も成長してまた必ずカンボジアを訪れたいです。お世話になった皆さんには感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

2) カンボジアでの 2 週間を終えて

人間社会学域国際学類 2 年 千種麻莉 (グループ 1)

今回、14 日間のアンコール遺跡群でのインターンシップに参加しました。以前から環境問題、特に持続可能な社会づくりに興味があった私は、このインターンの説明会で、アンコール遺跡群は世界遺産の敷地内で人々が生活している珍しい遺跡であるということを知り、とても衝撃を受けたことを覚えています。経済発展のために新たな観光ルートを開発して、観光業を盛んにしていかなければならない一方、人々の生活を守らなければならないし、自然環境との共生も忘れてはいけない…これらのことがどのようにして行われているのか、自分の目で確かめたいと思い参加しました。また、将来英語を生かした職業に就きたいと考えているので、コミュニケーションツールとしての実践的な英語力を試したい、伸ばしたいとの思いもありました。

最初の 1 週間は、ほかのインターン参加者と共に、公団職員の方々からアンコール遺跡群の基礎的な知識やカンボジアの暮らしについて等を教えてもらったりしました。アンコール遺跡群に関する私の事前知識は今考えると皆無に等しく、テレビや雑誌等でよく見る「アンコールワット」がすべてなのだ、というイメージがあったので、バイクやトゥクトゥク、自動車といった乗り物を使用しないと到底回り切れない遺跡群の土地の広さにとっても驚きました。また、アンコールワット、アンコールトム、タ・プロムの観光客がよく訪れる 3 大遺跡のほかにも、見どころがたくさんありました。公団職員が遺跡の見どころや歴史背景、宗教に関することを教えてくれたので、とても充実した学習でした。

私たちはアプサラ公団の水質管理部門という部署の下でインターンシップを経験させていただいたのですが、初めはなぜ遺跡内で水質の管理がそこまで重要になってくるのか、とても不思議に思っていました。遺跡群内にはバライと呼ばれる巨大貯水池や運河、水門等水を管理する設備が多数存在していて、公団職員にそれらの機能やシェムリアップの地形、カンボジアでの生活を教えてもらって理解したのですが、理由は、大きく 4 つあります。まず、水量を調節することで、洪水時にシェムリアップ川の氾濫を防ぎ、市街地を守るため。次に、バライの中心には水の上に浮かんだ寺があり (宗教的理由)、その寺の土台は水と砂が合わさることで安定しているので、常に一定の水を供給することで、寺を守るため。そして、遺跡群内では人々が農業を行って生活しているので、水を灌漑に使用するため。最後に、人々が毎日の生活に利用するため、とのことでした。水門やダムを実際に視察したのですが、水門を閉めるときは人力で門を閉じなければならないし、ダムもせつせと人が掘っていて、日本との違いに衝撃を受けました。水質管理部門が、人々の生活や遺跡の維持になくてはならない、大きな役割を果たしていることが、身をもって分かりました。

水質管理部門の中でも、私が一番お世話になったのはルン・タ・エク・エコビレッジを

扱うグループでした。ルン・タ・エク・エコビレッジという村は、アンコール遺跡群内の人口が過密になったため、遺跡内の人口を減らすために作られた新しい村です（写真 1）。政府やアプサラ公団が新居の資材や農業用地を無料で提供したことで、初めは活気があったそうなのですが、今は市街地からとても離れていて働く場所がないことを主な理由に、あまり人がいませんでした。しかし、ルン・タ・エク村は、とても空が青く、空気もおいしく（シェムリアップ市街地は自動車やバイク等の排気ガスで空気が汚れていたため）、南国の地を思わせるようなすてきな場所でした。このような場所が日本にもあったら、きっと日々の忙しい生活に疲れた都会人が精気を養いに多く訪れるのではないかと思います。しかし、カンボジアではそんな現実を言ってばかりでは解決しないので、公団職員に私たち日本人が感じたこと、これから何が必要だと思うかということ伝えてきました。私たちの考えや思いが、少しでも今後の政策のプラスになればいいなと思います。



写真 1. ルン・タ・エク・エコビレッジ

毎日の業務を公団の方々と一緒に行ったのですが、みなさんととても気さくで、いたずら好きで、でもたくさんのお話を一生懸命私たちに伝えようとしてくれて、最後のお別れは本当に辛かったです（写真 2）。公団の人たちとの会話の中で一番心に残っているのは、自分の名前の由来を説明していたときのことです。私の名前は苗字の漢字との画数の相性で名づけられた名前なので、漢字という表記文化を持たないカンボジアの人にそれを説明するのは一苦



写真 2. グループのメンバー集合

労でした。英語で伝えても、画数という概念のない彼らはイマイチ理解をしてくれず、でもなんとかして伝えたいと思い、紙に書いて説明するうちに、理解してもらうことができ、とてもうれしかったです。また、自分の感情を表現したり、意見を伝えたりするときに英語しか手段がないという事態にもどかしさを感じたことも多々ありましたが、今回のインターンシップを通してもっと英語を使えるようになりたい、やはり将来はこうやって外国の人と関わる職業に就きたいと強く思いました。

業務以外の活動も、毎日とても充実していて 2 週間はあっという間に過ぎ去ってしまいました。ごはんもおいしいし、朝ごはんを買うパンもとてもおいしいし（カンボジアはかつ

てフランスの植民地だったため、パン屋がいたるところにありました), スムージーも安くておいしいし…気づいたら食べ物のお話ばかりになってしまいましたが…。業務後に公団の人たちとバレーボールをしたり, 買い物をしたり, 孤児院で子供たちと元気に遊んだり, 毎日さまざまな体験をさせていただきました。また, 途中, 疲労のため高熱をだしたり, 盗難にあい, 観光警察で3時間事情聴取をされたりしたこともありましたが, 今となっては貴重な経験です。私のカンボジアでの2週間は, ” Play hard, study hard”, 「よく遊び, よく学ぶ」ことのできた最高の2週間でした (写真3)。このような素晴らしい機会を与えてくださった方々にとても感謝しています。この経験を生かして, 今後も大学で勉学に励み, いろいろなことにチャレンジしていきたいと思います。



写真3. インターンシップのメンバー

3) カンボジアでの 2 週間

理工学域物質化学類 3 年 堀佐菜子 (グループ 2)

2014 年 8 月 23 日～9 月 7 日、私はアンコール遺跡整備公団 APSARA (アプサラ) 公団へのインターンシップに参加した。応募した理由は、カンボジアを訪れたことのある知り合いからとても魅力的なところだと聞いていて興味があったため、大学生のうちに海外に行き将来への視野を広げたかったためである。行く前は初めての海外渡航が、発展途上国へのインターンシップという形になったことで多少の不安はあったものの、現地での 2 週間は毎日が充実していて忘れられない経験になった。

私たちグループ 2 のテーマは「全体」ということで、APSARA 公団が行っているアンコール遺跡周辺の水管理システムと地域住民とのつながりについて学んだ。

カンボジアの 1 年は乾季と雨季に分かれているため、1 年間を通してゲートの開閉などを用いて一定の水量が下流へ流れるよう調節することが重要となる。水は、なくてはならない重要な資源あるが、多すぎたり少なすぎたりすれば遺跡や地域住民に被害を与えうる。水源はシェムリアップ市の北東に位置するクーレン山であり、アンコール遺跡群やシェムリアップ市内やその地下を通してトンレサップ湖まで流れる。クーレン山から流れてきた水はスピアン・トムという水門のゲートを通すが、このゲートを開閉することで下流の水量を調節する仕組みになっていた。周りに遺跡があったりたくさんの人々が住んでいたりするシェムリアップ川が、最も大切な川だそうで、スピアン・トムのおかげで大量の水がシェムリアップ川へ流れ込むことがなくなり、毎年シェムリアップ市で起きていた洪水がなくなったと公団の方がおっしゃっていた。とても重要なものであることは分かったが、ゲートが 2012 年に作られたと聞いて最近であることに驚くとともに、まだ管理体制も機能し始めたばかりでありここから課題も次々に出てくるのだろうと思った。

どうして水量の調節が重要なのか。それは水が重要な役割を担っているからである。主にバライ (人工的な池) やお堀に貯水しておいたり、水門を建設しそれを開閉したりすることで水量の調節を行っている。水の役割としては主に 5 つある。

- 1) 洪水の防止：アンコール地域は 1 km で 1 m しか標高が下がらないそうで、とても平坦である。水の逃げ場がなく、半日降り続いただけでも街中の道路や水田にたくさんの水がたまっているところを何度も見た。そのため、水の進路方向を増やしそれぞれに流す量を調節することが重要だと感じた。
- 2) 建物や寺院のサポート：アンコール地域の地質は主に砂岩やラテライトであるため、水分がすくなくと地盤が傾いてその上にたつ遺跡などにも影響を及ぼす。実際、遺跡を訪れると寺院が傾いていたり、石が落ちていたりしている箇所が多くみられた。
- 3) 水分の保持：バライや堀に水を貯えておくことで、砂岩中の水分が失われるのを防ぐのである。

4) 西バライでの灌漑：西バライの水は周辺の住民の灌漑に用いられているため、人々の生活にとっては重要な水源である。

5) 景観：堀の水に映った逆さアンコールワットや、西バライ越しに見る朝日や夕日は絶景である。

アンコール遺跡群が砂岩から成る建築物という点においても、そこに住む地域住民との共生という点においても、水との関係が重要なものであるのだ。APSARA 公団の方々は、流れる水量や水圧を計算してゲートを作ったり、定期的な水量の測定を行い流れる水量を調節したりしている。水路はアンコール遺跡が作られた時代の運河を補修したものである。公団の方々は地図で場所を確認しながら、水路の様々な場所を案内してくださったが、アンコールワットが建てられた時代に、広大で平坦なこの土地に膨大な規模の水路が確立されていたことに素直に感動した。ゲートは耐久性の問題もあるため、コンクリートで補修されていたが、水路やバライの土手はすべて土で作られていた。それは古代のものを守り続けなければならないためだ、と公団の方々は何度も何度もおっしゃっていた。古代のものを人々が使いながらも守っていくということは、ただ保護するより難しく大変なことだけれどそれ相応に価値のあることだと感じた（写真1）。



写真1. シェムリアプ川に建設されたゲート

ある日、今年洪水が起こりそうな場所を聞いてみた。すると、もし今年の雨季でたくさん雨がふったならば、ポーク川の下流では洪水が起こるだろうと話していた。それを防ぐためには、今ある3つのダムで水をせきとめるのではなく、周囲の田畑をつぶして、ゲートの開閉で水量を調節できる水門の建設が必要だそうだ。しかし、「私たちは今年の雨季におそらく洪水が起こるであろうことを知っているけれど、住民たちも生活がかかった田畑を簡単には手放してくれず、私たちの説明を信じてくれない。田畑の買い取りにも水門の建設にもたくさんのお金がかかる。それは本当に大きな問題だ」と公団の方は悲しそうに話してくれた。それを聞いて、誰が悪いということではないけれど、とても悲しい気持ちになっ



写真2. 公団の方の話聞き

た。そして公団の方々は、アンコール遺跡の重要性と価値はもちろん、何より地域住民のことを大切に考えているのだと思った（写真2）。

業務中のやりとりは全て英語だった。これに関しては自分が力不足過ぎて、もはや後悔しかない。語彙、スピーキング、リスニングの力のなさを痛感するとともに、公団の方の優しさに甘えた。私の話す拙すぎる英語を最後まで真剣に聞いてくれたし、私が聞き取れなかったら何回でも繰り返してくれ、ときには筆談にしてくれた。それでも分からなかったら辞書をひいて理解するまで待ってくれた。私の話が伝わらなくて、公団の方が困ったような顔をして申し訳なく思う時もあった。私が1回で聞き取れていたなら、3倍、4倍もの会話が出来、たくさんの考えを、そして気持ちを、伝えられたのではないかと思うと、今でも悔しい。しかし考えが伝わったときや、英語を通してクメール語と日本語をお互いに教えあったときの喜びや楽しさは格別だった。最終日のバーベキューで“色々お世話になりました”と覚えてたのクメール語で伝えたときは、みんなうなずきながら嬉しそうに聞いてくれた。表情や雰囲気から分かる場面もあるが、出来事や気持ちを理解しあうためにはやはり共通言語の英語が大切だと実感した。この気持ちを忘れず、これからもっと英語の勉強を積極的にしたいと思ったし、英語を使う場面を自分から見つけ出していきたい。

業務後には公団の方々とバレーボールをした。話には聞いていたものの、ここまでバレーボールが盛んだとは思っていなかった。16時までディスカッションをしていたときは、「いつまで話しているの!?もう4時だよ!早くバレーボールをしに行くよ!!」と急かされたし、夕方からはしきりに天候を気にして今日はバレーが出来るかなと心配しあった。バレーを通して、違うグループの公団の方とも交流が出来た。スパイクが決まればハイタッチをして盛り上がるし、ミスもお互いカ



写真3. 業務後のバレーボール

バーしあって一緒にプレーをしてとても楽しかった（写真3）。バレーコート場は、日本でのテニスコート場のようにいくつもあり、いつも多くの人で賑わっていた。バレーコート自体は村を見学しているときや、湖で水上生活をしている人々の近くの陸にも見られたので、カンボジアの人々にとって身近なスポーツであることがみてとれた。バレーボールを続けてきてよかったなと思う瞬間でもあった。

業務中も休みの日も含め、本当に様々なところへ連れて行っていただいた（写真4）。アンコールワットやアンコール・トムをはじめとした遺跡の数々、北バライとその中心ニャックポアン、西バライとその中心、樹木が遺跡を覆っているタ・プローム、美しい赤色砂岩のバンテアイ・スレイなど、どれも圧巻のスケールだった。細かい彫刻がいたるところ

に見られ、全体を見ても細部を見ても感動した。業務は、水関係だけではなく、伝統的な環濠集落やクメール建築についても教えていただいた。希望していた孤児院の訪問もさせていただき、子どもたちの元気に圧倒されつつパワーをもらった。有名なアプサラダンスを鑑賞したり、象にのったり、蛇を首にかけたり、みんなで夕日を見たり、値切って買い物をしたり、トゥクトゥクに乗ったり、ネイルやマッサージをしたりと思いつき楽しんだ。滞在中にはグループ2を担当してくれたメンバーの昇進パーティーや誕生日がありお祝いできたことも良かった。息をつく暇もないほど、毎日があっという間だった。食べ物に関しては、特に困ることはなかった。アイスクリームやスムージーを手ごろな値段で楽しめ、マンゴーやドリアンを食べることも出来た。フランスの植民地だ



写真4. 業務地へ向かうバイクから

ったことが関係しているようで、パンは日本よりおいしいと感じるくらいであったし、毎日食べても飽きないほどにバイチャー（炒飯）は絶品だった。

カンボジアでの生活は、個人的には困ることはなかった。2週間生活している中で多少は貧しい、不衛生だと感じてしまうこともあったが、それより私の心に何よりも強く残ったのはカンボジアの人々のくったくのない笑顔である。街中を歩いていても、遺跡を見学していても、業務をしていても、現地の人々は大人も子供も変わらない笑顔で出迎えてくれた。それはかけがえのないもので、日本では見ることの難しいものの一つだと感じた。カンボジアの人々の人柄の良さと素敵な笑顔が大好きになった。

最終日には、プウさんと面談をした後に、このインターンシップが5周年ということで植樹をさせていただいた。あの木がもう少し大きくなった頃に、同じように一回り大きくなったカンボジアを見に、そしてお世話になったたくさんの人に会いに、カンボジアを訪れたい。

最後になりましたが、今回のインターンシップでお世話になった塚脇先生はじめ、大学関係者の方々、チューターの賀織さん、プウさんとアプサラ公団の方々、運転手のペンさん、関わってくださったすべての人に感謝しています。貴重な体験ができました。ありがとうございました。

4) 念願のカンボジア

人間社会学域経済学類 2 年 櫻井香奈 (グループ 2)

小学校 6 年生のとき、私は授業で世界遺産についてグループに分かれて調べ学習を行った。それが初めてアンコール・ワットに興味をもった時だった。8 年後、金沢大学でアンコール・インターンシップの存在を知り、小学生のときに時間をかけて調べたことを実際に目で見るのできる良い機会だと感じ、何としても参加したい思いに駆られた (写真 1)。



写真 1. 念願のアンコール・ワット

ついにカンボジアへ。シェムリアプ空港に着き、いざ空港へという時に飛行機から階段を使って一度地面に降り立つのは衝撃であった。さらに、これがカンボジア！と感じたのが夜 11 時頃の、外の空気に触れた瞬間の湿度の高く暑いむわっとした空気であった。これから 2 週間どんな生活が待っているのだろうと期待と不安が入り混じっていた。いえ、正直不安でいっぱいだったと思う。特に心配していたのがお腹を壊さないかどうかと、カンボジアでは大切にされているヤモリの存在。しかし、どれも振り返ってみたら全く問題なかった。むしろ、慣れない食べ物とヤモリと共にカンボジアを満喫できた気がしているくらいだった。今から私の約 2 週間のカンボジアでの体験を振り返ろうと思う。

まずは業務について。私たちがお世話になったのは国立アンコール遺跡整備公団 (アプサラ公団) で、4 つのグループに分かれて活動した。私の所属したグループ 2 はシェムリアプとアンコール地域全体の業務を担当するという、これまでで初めての取り組みを行った (写真 2)。全体を把握するのは大変そうで心配であったが、2 週間ずっと他のグループと行動を共にすることがほとんどで、分からないことや細かな情報を確認・共有することができた。



写真 2. グループ 2 !

公団の人たちからさまざまなことを教わったが、グループ 2 の研修を主に担当してくれた方が西バライ地域に詳しい人であったため、遺跡の周りの水管理の話が中心であった。そもそもなぜ水管理を行う必要があるのか、水管理はどのような方法を取っているのかを

現在建設中の設備等を見せて頂きながら説明を受けた。

水はクーレン山からシェムリアプ川に注ぎ込まれ、そこからスピアン・トムと呼ばれる水を分流させる構造を通り、人工貯水池であるバライや市民の生活用水の供給のために川へと流れていく仕組みとなっている（写真 3）。この仕組みを保つにあたり、洪水の問題が立ちはだかる。水の量と方向を分散させる仕組みを絶えず作らなければならないのだという。なぜ絶えず作るのかといえば、ある地域での洪水を抑制することは、それまではそこを流れていた水を別のところに逃がす必要性を意味するからである。そのため既存の設備に対する restore（修復）を繰り返すことが不可欠のだと教えていただいた。



写真 3. スピアン・トム

さらには、洪水を防ぐためにダムを撤去することを、田畑を農耕している地元住民に認めてもらえず、交渉が続いていることを聞いた。両者の利害関係によって話が進まないのは日本でもよく見られることである。諦めずに洪水の危険を理解してもらおうと説得し続けるしかないと言っていた公団職員の話は非常に印象的であった。どんな理由で自分があることについて賛成しているのかを、反対している人に対して伝えるのは非常に難しいことであるが、両者が納得できるようなポイントに出来る限り近づけるよう交渉を進めるのは大切なことであると感じた。

次に日常生活について。とにかく物価が安く、食べ物はおいしいし、ショッピングはとても楽しかった。業務終了後、大体 4 時頃から夕食までの間に公団の人たちとカンボジアで盛んなバレーボールをしたり、夕日を見たり、買い物に行ったり、アイスクリームやスムージーを食べに出かけるなど自由に過ごした。思い出は皆で揃って食べたごはん。ごはんの席では、その日にしたことを振り返ったり、公団の人のおもしろかった話で盛り上がりたりした。



写真 4. 思い出の中華料理

た。Woodhouse Restaurant という中華料理屋さんには約 2 週間の滞在期間のうち何度も行った（写真 4）。まるで日本のお味噌汁を飲んでいるかのように、そのお店ののりスープは落ち着く味だった。他にもピザやパスタといったイタリアンが食べられるレッドピアノ、タイガー、ベトナムのフォーのお店など毎晩先生に教えて頂いたお店に行き、お腹いっぱい

いになってナイトマーケットに繰り出す日々だった。ナイトマーケットは夜真っ暗な中に明かりが灯り、露店でにぎわう市場である。お土産や自分のほしいものをぶらぶらしているうちに見つけ、合言葉は“Discount!”で値段交渉をする。先生やチューターの賀織さんから値切り交渉術を習い、帰るころにはほとんど皆が身につけていた。

孤児院で子どもたちと遊んだことも心に残っている(写真5)。私はニュースで見たことや自分自身の体験も踏まえ、周囲の環境は人に大きく影響すると感じている。幼少期に見て聞いて学ぶことは将来のその人を形成するため家族の存在は不可欠だと考えていた。しかし、大切なのは近くにいる人がどう接していくかということだと今は思う。孤児院の子どもたちとは、日本から皆で持って行った紙風船や大縄跳び、折り紙等で遊んだ。大学に入ってから



写真5. 子どもたちと仲良くハイチーズ

らしばらく、体を動かしていなかったため子どもたちの元気さに圧倒された。声をあげながら楽しんでいる子どもたちとともに私もずっと笑いながら遊んでいた。私たちが帰る頃には、手にキスをしてお礼をしてくれるなど本当に礼儀正しく、私はとても暖かい気持ちになった。カンボジアに行くことが決まる前から、子どもに関わる仕事をしたいと思っていたため、孤児院を訪れたことは自分の将来について改めて考えるきっかけとなり本当に良かった。

ハプニングもあった。私は滞在中に日本でもよくある症状のために熱を出してしまい、業務の1日と休日の半分ほどをホテルで寝てすごした。ずっと寝ていないといられないくらい体がきついのと同時に皆と活動できないことが本当にもったいないという思いでいっぱいだった。私が寝ているときには、チューターの賀織さんが食べ物や飲み物を買ってきてくださるなど本当にお世話になった。貴重な活動時間を減らしてしまったが、慣れぬ土地で体調を崩してしまったことも人生の中の一つの経験として良かったと捉えている。

インターンシップを通して、公団の人やシェムリ・アップの街にいたくさんの人と出会い話す機会がたくさんあった。言いたいことがすぐに英語にできないもどかしさも多かったが、自分の知っている知識の中でどうしたら自分の言いたいことが伝わるかを考える訓練が出来たと思う。私が何と言ってよいのかわからず、辞書を使って調べているときには、公団の方々には調べ終わるまで待っていてくれ、時には相手の言いたいことを紙に書いてくださった。周りには、感情豊かに自分の気持ちを英語で表現している同級生や先輩がいて、私も英語を使って言いたいことをそのまま言えるようになりたいと思った。本当に使いたい言葉の代わりに、自分が知っていて意味が似ている言葉を使うと、表現の質を落としてしまうと感じるからである。大学生という勉強時間が膨大に確保できる今だからこ

そ、英語の勉強にこれからもっと取り組んでいこうと思う。

最後に、私たちのお世話をしてくださった塚脇先生、辻谷さん、チューターの賀織さん、一緒に約2週間を過ごした参加者の皆、アプサラ公団の方々、参加を認めてくれた両親、関わったすべての方に感謝するとともに、この報告書がこれからのアンコール・インターンシップ実施のための役に立てれば幸いである。

5) カンボジアでの経験

人間社会学域国際学類 3 年 長谷川美華 (グループ 3)

このアンコール遺跡整備公団のインターンシップに参加した理由は、発展途上国での観光事業について興味があったからだ。私は私費留学中に旅行学を半年間勉強したが、途上国についての情報は少なかったため、観光客を誘致するためにどのようなことをしているのかを現地で学ぶことができればと思い参加させていただいた。しかし、この 2 週間では観光分野に限らず、自然と観光事業と地元住民の共存、日本とは全く異なる水・水質事情を学ぶことができ自分の視野を広げる貴重な経験になった。

私は北バライ貯水池を中心としたプロジェクトを行っているグループ 3 に参加させていただいた。そこで学んだことは北バライに限らず、西部にある最大の西バライ貯水池、開発中のルン・タ・エク・エコビレッジ、伝統的なカンボジアの家の構造、アンコール遺跡群の中の各建造物についての神話・歴史など多岐に渡るが、ここでは北バライのプロジェクトを紹介する。

北バライはアンコールトムの北東、プリアカン寺院の東に位置する貯水池で、中央にニャックポアンという寺院がある。北バライの歴史は 12 世紀にさかのぼり、古代の王朝に建設されて以来常に水がある状態であったが、戦乱により水路などの水関連システムが破壊されたため、アンコール地域の土地は乾燥し農作物が育たなくなり、農業に依存した経済を維持することができなくなった。そこで住民はアンコール地域を離れてプノンペンで貿易を中心とした生活を始めた。そのため 500 年前に北バライからは水がなくなったが、2008 年にアプサラ公団のプロジェクトにより再び水が入れられたため、現在は 500 年の間に育った木々が水の中で枯れているという風景となっている。しかし、本来の北バライの風景は植物が何も無いというものなので、少しずつではあるが枯れた木々を切っているとのことだった。

北バライの役割は、アンコール地域にある他の南・東・西の 3 つのバライに共通する 3 つの役割と、北バライ独自の役割が 1 つある。まず、共通の役割は、洪水の防止・軽減、地下水の水位の維持、それによる寺院の下の地盤安定と地元住民の井戸水の確保である。アンコール地域の標高は北東が高く南西が低い構造になっているため、北東での洪水はアンコール遺跡群に被害を与えてしまう。それを防ぐためにシムリアップ川に大きな水門を作り、



写真 1. 修復された運河

これを閉じた時に北バライやさらに西方の運河に水が流れるという構造になっている（写真 1）。また、アンコール地域の寺院の構造上、地下水の維持は非常に重要である。アンコール遺跡群はしっかりとした土台の上ではなく、地面の上に建てられているため、地盤に水が浸透していないと遺跡は傾いてしまう。そして、その地下水は地元住民の生活用水として井戸からくみ上げられるので、常に貯水池に水を入れ地下水を維持することが重要である。

また、北バライ独自の役割は貯水池の中央に位置するニャックポアン寺院の中の池の水の維持である。ニャックポアン寺院は王朝時代に病院として使われ、人々は 5 つあるうちの 4 つの池で沐浴をして病気を治したと言われている。中央の池には地下水から水がしみだし、その水が周囲の 4 つの池との間にある人、ライオン、馬、象の形を模したパイプを通ることで聖なる水となって 4 つの池にそそぐという構造になっている。

北バライでの観光事業は、ボートツアーである。ツアーは 3 種類あり、それぞれ、内容、値段、時間帯が異なる。ニャックポアン寺院の訪問を含むもの、含まないが森の中を歩きバードウォッチングをできるもの、昼間だけでなく夕方のツアーなど、観光客が好みに応じて選ぶことができるようになっている。このツアーは学生を主体とした地元住民のボートコミュニティによって運営されておりオーストラリア人がガイドの指導に当たっている。ツアー代金はツアー運営に携わる地元住民の生活資金や、保全活動の資金に充てられている。

このツアーは企業に委託することもでき、その方が費用も削減できるが、あえて地元住民に運営を任せている理由は、まず生活資金の確保、そして保全事業への参加を促進するためである。アンコール地域は農業が主体の経済であるが、このツアーを地元住民のみで運営することで、彼らは観光事業により生計を立てられるようになるということだった。しかしこのプロジェクトはまだ始まったばかりでいくつも改善点が見られた。私も事業用のボートに乗り北バライを渡りニャックポアン寺院まで行ったが、貯水池の中の枯れた木々でボートが通れない部分があり、水生の花もあつたが少ないと感じた。また、ボート乗り場に行くまで森の中の小道を通るのだが、一本道ではなく入り組んでおり経路がわかりにくく、森林でのバードウォッチングがツアー内容に含まれているが、特に植物や鳥について説明した看板は見られなかった。これらの改善策としてボートツアーのコース上の水生植物を増やしたり、経路を示す立札を立てたり、植物の名前を書いた札や鳥についての看板をつけることを提案した。そのうち鳥についての説明の看板は地元住民が紹介・説明する必要がなくなってしまうため立てられないと公団の方はおっしゃっており、無意識のうちにカンボジアでの視点ではなく、日本視点で考えてしまっていたことに気づかされた。

ここまで述べた北バライ以外の訪問地でも改善点やなぜこうしないのかと思う点があつたが、発言する前にそれは日本の資金と技術があるからできることだと気付いてしまうことがたくさんあり、途上国での観光事業と保全活動の難しさを感じた。また、資金と技術

の問題だけでなく、大型の工事用車両や近代的なコンクリートのような素材が使用できないなどの世界遺産ということによる制約があると公団の方々に聞き驚いた。

業務外の時間では公団の方々とバレーボールをしたり遺跡に夕日を見に行ったりした(写真2)。カンボジアではバレーボールがとても人気でいつもコートにはバレーをする人々がたくさんいた。一度なぜサッカーや野球、バスケットボールではなくバレーボールが人気なのか聞いたところ、バレーボールはボールとネットがあればできてお金がかからないからと公団の方はおっしゃっていた。カンボジアでは屋



写真2. プラカーン遺跡

外にコートがあるので専用のシューズは必要なく裸足かサンダルでプレイしており、決してスポーツをするのによい環境ではなかったし、初心者と経験者が混ざっていても、みなさん本当に楽しそうにプレイされていた。一度訪ねた孤児院の子どもたちも、両親がいないさみしさをこちらに感じさせないほど、人懐っこく無邪気で元気な子ばかりだった。

しかし、遺跡では大きなかごを首や肩から下げて、観光客相手に笛やブレスレットなどを売っている小さな子供たちをたくさん見た。彼らは相手によって英語・中国語・日本語などを使い分けており、しっかり教育を受け、勉強に専念できる環境であればたくさんのかことを学び習得できるということが見ただけで想像できた。多くの高校生が大学に進学することができる日本は恵まれていると感じたし、その恵まれた環境の中でアルバイトやサークルに集中し、平気で遅刻や欠席をする日本の大学生はおかしいと感じた。

また、業務後や休日にマーケットに行き買い物をした。お土産や部屋着にズボンやワンピースを買ったが、本当に物価が安いと感じた。買い物をするときには値切るのが当たり前だし、その交渉中にお店の人と仲良くなるのも楽しかった。しかし、帰国から1か月ほどたった今では少し値切って当然という考え方に疑問を感じることもある。物価が安いのは単純にお金の価値が日本の10分の1だからであり、その値段が現地の人にとって安いわけではない。3ドルのものを2ドルに値切ってもこちらには100円ほどしか違いはないが、カンボジアの人びとにとっては1000円ほどの価値の違いになる。しかもアンコール地域は有名な観光地であることを踏まえると物価が



写真3. 夕食のカレー料理

相場から何割か高くてもおかしくないのではないだろうか。実際日本で観光地に行くと、ほとんどの場合何を買うにもいつもより高いと感じるはずだが、値切る人は少ないだろう。それと比較すると、カンボジアでは必ず値切るということには疑問を感じる。たまにありえない金額を最初に提示されるときは値切ればいいと思うが、これ以上は値切れないというところまで交渉するべきではないと今は感じている。

同じアジアの国とはいえ発展途上国で四季がないなど日本とは全く違う環境で、旅行より現地の方々と密接に関わることのできるインターンシップは本当に貴重な経験をさせていただいた。このような経験をさせてくださった大学や先生、公団の方々をはじめとした現地の方々に感謝したい。そして、この経験をあと 1 年半の学生生活や卒業後、就職後に活かしたい。

6) 私の見たカンボジア

人間社会学域人文学類 3年 外内都萌 (グループ 3)

カンボジアという言葉聞いたことがない人はほとんどいないだろう。カンボジアと聞けば、世界にある国の名前であることはわかるはずである。私もカンボジアという言葉を知っていた。それが国であることも、そして東南アジアに位置することも知っていた。しかし、そこに住む人々がどんな暮らしをしているのか、カンボジア人の人柄など、それ以上のことは知らなかった。そして、よく知らないのにも関わらず「被援助国」「貧しい」というイメージだけを持っていた。私にとってのカンボジアという国のイメージは本やテレビなどメディアのみによって形成されているだけで、私の身の回りと同じように、友達と話して、食事をして、買い物にでかける人々の生活の姿を実際に想像することは出来なかった。自分の目で、カンボジアという国を見てみたい、という理由で私はこのインターンシップへ応募した。このインターンシップでは、カンボジアの人々の働くアプサラ公団で、そこの人々と関わりながら学ぶことができ、また奨学金の支援が大きく、経済的負担が少ないことも、応募の理由である。

カンボジアでは、平日の業務で遺跡の歴史や水資源について学んだ。普段私たちが何も考えずに使っている水は、乾季のあるカンボジアにおいて、多くの寺院の維持のためにも、農業や生活のためにも、とても重要なものであり、その水をバライと呼ばれる貯水池に溜めるためのプロジェクトが行われていた。私の担当であった北バライもそのうちの一つである。カンボジアでは、山から流れる川の水や、そしてまた地下水が欠かせない。バライに川の水を溜めるということは、地下水を満たし、農業を可能にするということなのである。北バライも、500年もの間水が干上がっていたものを、土手を修復し、2008年に500年ぶりに水を入れたそうである。今もなお、より多くの水をバライに入れるために、修復が行われている。水を入れたことにより地下水が供給されたことは、生活用水を十分にするという側面に加えて、遺跡の維持という役割も担う。かつて地下水を過剰に使用し、地下水が少なくなったことで、地盤が下がり、傾いてしまった寺院があったのだ。地下水があることで地盤は安定し、人々の集まる観光地であり水の使用量も多い中で、地下水を安定して供給できるようになったことは、さらに観光地としての発展を可能にするのである。



写真 1. 北バライに浮かぶ水蓮の花

観光的な面から言えば、バライを再び水で満たすことは、古代の状態に近づけ、景観を美しくする。北バライには水蓮の花が浮かび、そこをボートで観光できるようになった（写真 1）。また中央にある寺院（ニャック・ポアン）は、その周りに池が複数存在するが、その水は地下水からのみ供給されている。北バライに水を入れたことで、またその神聖な池は水で満たされたのである。このように、アンコール遺跡は、観光地として年々発展し続けている。しかし一方でその問題点も存在した。観光施設の宣伝の不足や、その維持である。例えば、ボートのプランは、乗ってみればとても快適であるが、それを知る観光客は、まだ多くない。現在、SNS やプロシユアなどでも、告知はしているようであるが利用者は少ないようであった。しかしこのツアーは、民間企業に委託したものではなく、地域の人々によって運営されるものであるため、これからますますコミュニティの広がりを見せられるだろう。また、その利点として、その地をよく知り、アンコールで生きる人々と話ができるというものがある。業務中に、実際にボート乗り場に訪れた時も、彼らのその陽気さと、現地をよく知る様子がかがえた。

その他にも、観光客向けの説明書きなど、様々な工夫が凝らされていた。それにも関わらず、その文字が読めなくなっていたり、看板のみ放置されていたりなど、広大であるがゆえに手が行き届いてないことも感じられた。また美しいサンセットを見ることのできる地点まで向かう道が未整備であったことも、観光客の訪れを困難にしているように感じられた。しかしそれには世界遺産であるゆえに、開発に制限があり、道を整備できないという理由があった。観光地としての発展と、世界遺産の保存のバランスが、難しい問題に思えた。それでもその中で、アンコール遺跡をより魅力的なものにするために考えられた様々なプランがあり、それをその遺跡で生きる人々によって運営しようとする取り組みによって、それらはきちんと維持され、さらなる発展が臨めるのだろうと思った。

水問題としてさらに言えば、貯水の仕組みが修復され維持され、観光にも生活にも大きな利益を生み出しているのと反対に、下水の処理が未だ不十分であることも感じられた。観光客の増加に比例して、下水や排泄物の量も大きくなる。街には下水処理の場もあるそうだが、しかし未だアンコール遺跡の周りは不十分で、その開発も困難であると、公団の人たちは言っていた。そしてまた、それを実行するのに十分な経費がないとも。これからはずっと、大勢の人の訪れる観光地であるためには、そのような長い目で見た時の整備が必要であると感じられたが、それがうまくいかない歯がゆい思いを、彼らから感じるものがあつたように思えた。お金がない、その言葉は、発展の困難さを表しているように思えた。

しかしその困難を抱えながらも、アンコール遺跡は、素晴らしい世界遺産で、素晴らしい観光地である。アンコール遺跡——もっと言えばカンボジアを訪れて感じた、一番の魅力は、そこの人々の陽気さ、あたたかさであった。単なる遺跡見物以上の、そこに住まう人々とのやりとから得る楽しさは、アンコール遺跡を、素晴らしい観光地として成り立たせている大きな要因の一つであると感じた。公団の人たちはもちろんのこと、飲食店の人、

土産物売り場の人、ガイドの人、すべての人が笑顔で、気さくに話しかけてくれる。貧しさを感じる事も多くあったし、不便を感じることも多くあった。実際、まだ十歳にも満たない子供が土産物を売る仕事をしていることもあったし、赤ちゃんを抱えたまま、商売をしている人もいた。それにも関わらず、大変な生活の中でも明るく親しみやすい現地の人々は、いつも私たちに親切にしてくれた(写真2)。文化の異なる



写真2. 笑顔の素敵なお店のお姉さんと

ことの多いカンボジアの地で、引率の塚脇先生と別行動をとることの多い業務中においても、困ることがなかったのは、いつでも周りの助けがあったおかげである。注文がわからなければ、公団の人たちが英語に直してくれ、同じように現地の店員さんでもなんとか英語で説明しようとしてくれた。休みの日にマッサージに行けば、他愛のない話題で盛り上がった。そんな日常のやりとりは、カンボジアにきてよかった、またここに来たいと思わせてくれた。

このインターンシップでの2週間は、旅行で訪れる何倍も、また、海外ボランティアよりも、カンボジアをよく知ることができたのではないかと思う。カンボジアが単なる貧しい、支援を必要としている国というだけでなく、自国のことを自国で発展させるために、さまざまな地域に根ざしたプランを考えていたりすることは、実際にそのプランを考えるアプサラ公団の人々に説明を受け、その地を見なければ、わからないだろう。現地の人々の仕事の中にまじり、アンコール遺跡の観光プランや、そこに生きる人々の生活のための計画を学び、そしてまた多くの人と関わりながら過ごした2週間は、他の形でカンボジアを訪問しても、経験することができないことのように思う。

もちろん、街中のホテルに泊まり、食事でも毎日おいしいものを食べる事ができ、楽しいことをたくさん経験していた私たちは、私たちが訪問したような村の民家に暮らす人々とは、大きく異なり、カンボジアをしっかりと理解することができていないのかもしれない。しかし、アプサラ公団の人々をはじめ彼らとそこで過ごした2週間は、カンボジアという国の発展を心から願う気持ちになるには、十分すぎる時間であった。日本人におけるカンボジアのイメージの多くが、「貧しい」が先行するもの



写真3. 孤児院の子どもたちと

であることは、もったいなく、残念であると思った。

2週間、カンボジアに滞在して、改めて私のイメージが現実のうちのほんの一部だけを取り上げた、偏ったものであったことがわかった。業務の他にも、休日や夜には、トンレサップ湖を訪れたり、スムージーを飲んだり、カンボジアの伝統的な踊りを見たり、バレーボールをしたり、買い物をしたり、ネイルをしたり、いろいろなことが出来た。これらのどれもが、カンボジアを訪れるまでは思いもしなかった。人々が陽気で、子供が人懐っこくて可愛らしいことも、訪れて初めて知った（写真3）。

自分で実際に見て、感じたカンボジアは、想像よりもはるかに魅力的であった。この国の良さがもっと多くの人に伝わってほしいと感じずにはいられない。この2週間、私たちを安全に引率して下さった塚脇先生をはじめ、アプサラ公団の方々、関わったすべての方に感謝したい。

7) アンコール遺跡整備公団インターンシップ報告

人間社会学域法学類 3年 伊藤圭吾 (グループ 4)

私は、2014年度のアンコール遺跡群におけるインターンシップに参加させていただいた。もともと公共団体等で観光業や農業に関する仕事に就きたいと考えてはいたが、将来海外で働きたいとかアジアについて専門的に勉強したいという思いは特に無く、このまま卒業まで資格試験の勉強と就職活動で終わってしまう大学生活では視野が狭いと感じたことが、今回のインターンに応募した動機として大きかった。結果的に通常では経験できない体験をさせてもらい、大変勉強になった。本報告では、私がインターンを通して経験したこと、考えたこと等を簡単に述べていきたいと思う。

アンコール遺跡整備公団における研修ということで、当初は職業体験のようなものを想像していたが、実際には、アンコール遺跡群の歴史や地理を学んだ上で、現地の貯水池・水路を把握するという時間が大部分を占めた。私が所属したグループ 4 は西バライ (貯水池) 担当ということもあり、河川の運用について中心的に学ぶこととなった。アンコール遺跡群には実際に保護区域内で人が生活しており、さらに古代から続く長い歴史を有しているため、河川の運用という分野からでも歴史や地理をきちんと把握することが重要になってくるというわけである。

農業と観光産業が主要産業であるカンボジアにおいてアンコール遺跡群は重要な資源である。しかも、人々が保護区域内で農業を行っているため、遺跡を維持しつつ、そこに居住している人々の生活も両立させるためには「水」をどのように扱うかということが重要になる。比較的水資源が豊かなカンボジアにおいて、河川や地下水は遺跡の地盤を安定させ、人々の生活用水、農業用水として利用される一方、雨季には洪水を招き、広範囲に被害を与えるという側面がある。その「水」をコントロールするために、古代に造られた水路と植民地時代に造られた水路を使い分けながら、遺跡の保護と人々の生活を両立させるための方法や課題について学ぶことが私のグループの作業内容だった。

アンコール遺跡群をはじめとする寺院や遺跡が保護区域内にいくつもあるが、それらの周りに堀を造り、水を張り巡らせることは、建築物の基盤となっている土砂を安定させる効果があり必要不可欠な作業である。また、農村部を中心に人々は井戸から地下水をくみ上げて生活用水や農作業に使うことが多いため地下水量の減少が近年問題となっている。これらの課題に加え、雨季には増水した河川がシェムリアップ市内に流れ込み洪水を引き起こすことがある。市内は低地に位置し、排水システムが整っていないため、降水量によっては大規模な被害をもたらす。このような事態に対処するための方法として、バライと呼ばれる貯水池が使われ、水量を調節している。特に西バライはシェムリアップの中でも (そして世界でも) 最大の貯水池であり、遺跡を保護しつつ現地の住民の生活を支える上で、その重要性は高い。

また、観光業を通して外貨を稼ぐということには、観光資源の保護や治安の問題のみならず、大規模な土木工事や技術も必要であり、様々な分野の視点から見なければならない問題である。また、観光客による遺跡の損壊や地域の汚染といった問題も多い。しかし、アンコール遺跡群の利用により、カンボジアには観光客が数多く訪れ、それにより豊かになった現地の人たちも大勢いるというのも事実である。

具体的な業務の内容としては、午前中は公団の担当の方にバイクで西バライ周辺や農村に連れて行ってもらい、実際に目で見ながら説明を受け、午後は公団の本部へ戻り見てきたことについて質問、議論を行うという形式が一般的であった（写真 1, 2, 3）。午後の議論については、とにかく気になったところ、疑問に思ったところを担当の方々に聞いた。担当の方々も自分たちの専門外に関する質問まで丁寧に答えてくれた。時に訛り(?)のある英語や発音が聞き取れず、何回も質問し直しながら議論を進めた。保護区域内の地理や河川については名前を覚え、それらの目的をある程度説明できるようになることが求められた。なお、アンコール遺跡群全体に関する内容や農村の生活について学ぶ場合は、一日かけて他のグループと合同で行うことが多かった。それぞれの遺跡や河川は互いに場所が離れていることが多いため、移動の時間がやや長くかかった。



写真 1. 担当となった西バライ



写真 2. 西バライ南部の農村の風景

なお、業務中の会話は英語で行われた。私は、外国語を勉強としてではなく、作業語として使うという経験が初めてであった。今まで英語を勉強すること自体が目的であったが、今回は英語を使って何らかの目的を達成していくということになった。英語も言語である以上、意思疎通ができることが求められる。そういった点で今回のインターンは英語の勉強にもなり、その難しさを感じることもなった。また、異なる言語を持つ人とコミュニケーションをとることができる英語の重要性を実感した。

私はいわゆる発展途上国と呼ばれる国へ渡航したことは今まで一度もなかった。当初、カンボジアは発展途上国というイメージが強く、貧しくて治安が悪いという印象を抱いていたため、渡航前まではそれなりに不安もあった。しかし、実際に行ってみるとそのようなことは全くなかった。確かに先進国ではないかもしれないが、アンコール遺跡群のある

シェムリアップ市内は比較的平和であり、人々も穏やかであるという印象を受けた。観光を産業とする以上、治安維持を積極的に行わなければならないという政策的な理由もあると思うが、かなり過ごしやすい街である。

今回の滞在で私が特に印象を受けたことは現地の人々の生活である。日本のような国と比べると考えられないことも多い。まず、食事について言えば、場所によっては食べ物の調理や保存は不衛生にしか見



写真3. 西バライの水を利用している村の入口

えないこともある。農村では土埃を被った調理器具で穀物を加工していることもあったし、市場では、暑い中魚介類や果物も山積みにして売り、食用肉をその場で解体しているため臭いが凄まじい。しかし、それらに対して不快な感じはしなかった。むしろ、自分たちの食べる物がどこから来て、どのように加工されているのかということを感じさせられ新鮮な感じがした（さすがに実際にその場で口にする勇氣はなかったが）。食物の生産と消費が完全に切り離されてしまっている先進国に比べ、否が応でも「食べる」ということの意味を考えさせられる。

また、全体的に人々の生活にのんびりとした感があり、時間の流れ方がゆっくりである印象を受けた。農村においては調理も生活用品の作成も急がずに時間をかけて行っている所が多くみられたし、仕事をしている人達も多少の時間の遅れを気にしたりせず、常に忙しすぎないような様子であった。町中に散見される寺院では人々が熱心に、そしてゆっくりと参拝をしていた。要するに、皆どこかにのんびりとした感があるのである。これらは一面的な見方でしかないかもしれないが、効率とスピードをとにかく重視する先進国の発想からすると、やはり新鮮であった。

もちろん、発展途上国にありがちな問題も多い。医療もきちんと整備されていないところが多く、安全な治療が受けられないことが多いと聞く。小学生ぐらいの子供が働いているところを見たのも一度や二度ではない。カンボジアも全域的に見れば治安が非常に悪い所も多い。しかし、今回発展途上国と呼ばれる国での生活を通して、先進国的な価値観とは違う考え方を目の当たりにする場面が多かった。カンボジアの人々は物質的に貧しい面があるかもしれないが、その環境の中でもゆっくりと、しかし逞しく生活をしているという印象を受けた。

アンコール遺跡群整備公団のインターンに参加する利点として私が最も感じたのは、語学の勉強や旅行目的で海外に行くだけでは得られない経験ができるということである。カンボジアのような国に2週間という比較的長い期間滞在する機会はありません。日本とは異なった文化の中で実際に英語を作業語として使う経験は簡単に得られるもので

はない。そういう意味で非常に貴重な経験をさせてもらったと思っている。

そのように思えるのも、インターン期間中、色々と面倒を見てくださった公団の方々のお蔭である。こちらの拙い英語を理解しようと懸命に耳を傾け、口下手な私に気さくに接してくれて本当に有り難かった。今回のインターンを楽しかったと感じられるのも、公団の方々が親切に接してくれたところが大きいと改めて思う。もう少し英語が上手く話せたら公団の方々の役に立つ貢献ができたのではないかと思うと自分の英語力の低さが恨めしい。また、引率の塚脇先生をはじめ、様々な方々にお世話になった。たくさんの人の支えを受けて今回のインターンが無事終了されたと思う。



写真 4. アブサラ公団（業務最終日に）

8) アンコールインターンシップに参加して

人間社会学域国際学類 2 年 板垣政孝 (グループ 4)

私はこのアンコールインターンシップではアンコール遺跡内の西バライ地区の担当になり、APSARA 公団の水管理部門の方々にお世話になった。バライとはアンコール遺跡内にある巨大な貯水池である。中でも西バライは、縦 2.1 キロ、横 8 キロもある、人間が作った世界最大の貯水池だそうだ。

業務の初日、西バライの担当者の方々から、西バライについての説明を受けた。もちろん説明は全て英語である。分からない単語を電子辞書で調べるのにいっぱいいっぱいであった。この日のうちに西バライについての必要単語の 6 割近くを調べきつたろう。その後、実際に西バライに行ってみ学させていただいた。まずそこで教えていただいたのは西バライの水害についてである。カンボジアは温帯の日本と違い、温暖湿潤気候の国である。そのため、毎年、雨季と乾季が存在する。雨季になると西バライには水がそのキャパ以上に溜まってしまう。特に、西バライ中心部には西メボンと呼ばれる、古代の寺院が存在する。何もしなければその寺院が水害の被害に遭う。そこでバライの周りや寺院の周りには土手が作られている。また、その土手に植物を植えることで土壌の強化に努めている (写真 1)。



写真 1. バライの土壌強化のための植物

別日には西バライから農業地帯への水供給について教えていただいた。そもそも西バライが作られた理由は農業、土壌の強化、水害の防止のためである。中でも農業に比重が多く置かれていたそうだ。実際に農業地帯までの水路をバイクでたどった (写真 2)。所々には水門が設置されており、各コミュニティで管理されているらしい。農作業において水が必要になったら APSARA 公団に水門を開けるように依頼



写真 2. 農地で実際に使われている水路

し、西バライからの水を利用するのだ。水門は、取り外しができるような金属製のレバーなどは盗まれる可能性があるので外してあり、所々壊れていた。実際それは APSARA 公団

の方も問題として取り上げていたが、資金の問題、時間の問題などから、改善は難しいそう
うだ。「壊れたなら直せばいい」などとすぐに考えた私は、先進国の脳になっていたのだと
感じた。

農場を見たときもそれを感じた。農場は本当に規模が大きいものだった。私の実家は北
海道で農家をしている。それとも遜色ない規模であった。しかし、日本と違うのは大型の
機械をほとんど使わないということ。水牛や手作業で畑仕事をこなす。カンボジアの農家
の方々は、農場の規模が大きく機械がない分多くの労力を必要とするにもかかわらず日本
よりもずっと貧しい生活をしている。それがどうしても不平等に思えた。

水の流れについてはもう少し詳しく教えていただいた。西バライに水が入る仕組みとし
てはまず雨がある。雨季を利用し水をバライに供給する。もうひとつの経路としては、川
の流れがある。シェムリアップ市の北に位置するクーレン山からシェムリアップ川をと
り、運河、小さなため池を経て西バライに水が入る。その運河について興味深い歴史の
話を聞いた。

西バライに水を運ぶ運河は現在二つあ
る。12世紀に作られたものと、1960年代
にフランス人に作られたものである。12
世紀に作られた運河はカンボジアでの内
戦で破壊されてしまった。そこでフランス
が1960年代に新しく運河を作ったのだ。
その後2012年には古代からある運河がア
メリカによって修繕され、APSARA 公団
は、昔ながらの運河を利用することでその
復興を果たした。現在、緊急時以外はフ
ランスの運河は使われていないそうだ。



写真3. 運河が西バライの前で交差する地点

西バライ以外ではルビア・ビレッジに連れて行っていただいた。ルビア・ビレッジとは
古代から存在し続けている村であり、その場所固有の生活がなされている場所である。村
は円形状に作られており中心部にはコミュニティを仕切る建物、また、妖精のようなもの
を祀り、毎年祈りを捧げているそうだ。生活としては、乾季と雨季で活動が分かれるのが
特徴で、乾季には主に魚を採り、雨季には農業をしているそうだ。貨幣などを使わずに物々
交換で必要なものを得ている。また、急にお金が必要になった時には魚を売り、お金を前
借りし、利子をつけて返す、ということをやっているらしい。時代の進歩によって貨幣は
どうしても必要なものであると思っていたが、それに可能な限り頼ろうとしないルビア・
ビレッジの伝統の継承に驚いた。伝統を守るために他地域からの移住を禁止し、村を守る
ために村への入口を少なくしている。そんなルビア・ビレッジでも問題はある。どこの家
族も子沢山で世帯が増えてくると伝統的な家屋以外にモダンな家が増えてきてしまう、と
いうことである。それを問題とするルビア・ビレッジは伝統を重んじると同時に、保守的

であるように感じた。

クメール式の家についても教えていただいた。温暖湿潤気候のカンボジアではそれに適した伝統的な家屋が存在する。富裕層が主に住んでいたクメールハウス。一般的な庶民が住んでいたルンハウス。冷たい風が下から上へと流れていくルンダウ。その屋根の形が変わったルンドン。さらに、神につながる象徴である飾りを屋根に飾ったペス。それぞれ屋根などに違いがあり、その特徴を教えていただいた。また、それらの伝統的な家屋がコンクリートを用いたモダン的な補強をされているということも職員の方がおっしゃっていた。クメールの家屋を作る上ではコンクリートよりも木の方が適しているようである。

見学以外には APSARA 公団の方々とディスカッションをさせていただいた。その日に見学したものはどういうものだったのか、私たちが理解できていなかったことを徹底的に教えていただいた。最初は電子辞書が手放せなかったが、初日で必要単語をメモしていたおかげで後になると電子辞書を使う回数は減っていったように感じる。苦労したのは発音である。私たち日本人が学校で習ってきたような発音とは違うというようなことが多々あった。例えば **ancient** (エンシエント) がアンシエントと発音されていた。聞いただけでは分からず辞書を引くがそんな単語は存在しない。APSARA 公団の方にスペルを書いていたきょうやく **ancient** と判明。英語はグローバルな言語だと思っていたが、地域ごとになまりのようなものが存在するということがわかった。

休日にはトンレサップ湖にも連れて行っていただいた (写真 4)。トンレサップ湖はカンボジアが誇る湖で、淡水での漁獲高は世界一の湖である。非常に興味深かったのは湖に木々が生育していることであった。水位が最高で 9 メートルにもなる湖であるにもかかわらず木々が立派に生育していた。また、湖の上には人が生活をし、一種のコミュニティを形成していた。水の上に学校や病院、商店などが栄えていた。その中ではワニを飼育していたりお土産品を売っていたりと、観光客を意識しているような作りになっていた。人々のほとんどは漁民として生活しているようだ。



写真 4. トンレサップ湖のようす

今回のアンコールインターンシップで語学以外にも様々なことを感じ、学んだ。カンボジアに来る前は、カンボジアは発展途上国である故に危険な国であるイメージ、また、不衛生で汚いイメージがどうしても頭の中にはあった。飛行機から見たスコールの雷の光を本気で何らかのデモやテロだと思ってしまうほどであった。飛行機の中では本当に不安になった。実際にカンボジアを歩くとその不安はなくなった。たしかに街中はごみ捨ての習慣が定着しておらず、少々汚いように感じたが、人々は本当にいい人ばかりであった。マ

マーケットで買い物をしていると多くの店員さんと話す機会があった。彼女たちはみんながみんな心からの笑顔であった。日本ではまずそんなことはないだろう。日本よりもずっとカンボジアの店員さんの方が接客されて気持ちがよかった。

孤児院を訪れる機会もあった。私は未だに姪っ子になつかれないほどに子供との接し方がわからなかった。また、孤児に対しても何か暗いイメージを持っていた。いざ訪れると子供たちはみんな明るくて驚いた。「自分たちは兄弟だ」と言ってくれたのが本当に嬉しかった。日本を否定するつもりはないがよっぽど日本の子供たちよりも子供らしいように感じた。カンボジアに来たことで発展途上国に対するステレオタイプな考えを今まで自分が持っていたことに気づいた。

今回のアンコールインターンシップは私にとって本当に貴重な経験となった。APSARA 公団のある方が言った。「どうして男の子達は喋らないの？」返す言葉もなかった。自分の人見知りか人生で一番嫌だと感じた瞬間だった。いつの間にか自分が他人に歩み寄る事をしなくなっていたことによろやく気づいたのだ。「喋る」という行為の必要性が少しばかりわかった。

また、第一目的である語学力の向上については、自分の伝えたいことが伝えられないことや、相手の言いたいことを理解するのに時間がかかってしまった。APSARA 公団の方々と Facebook で友達になりメッセージを交換するときにももっと英語が話せたらと感じた。今回のインターンシップでは今後の英語力の向上に対するモチベーションを得ることができた。

まだ、帰国後に何をするのか具体的には決まっていけないのだが、これら二つのことが今後の課題であることがわかった。知らない人ともっと話してみたいと思うようになったし、言葉をもっと話せるようになりたいと思うようになった。だからそのための勉強を一生懸命したいと思う。今回のインターンシップに関わった先生方、APSARA 公団の皆さん、カンボジアの皆さんには本当に感謝している。

4. チューターの報告：2度目のカンボジア

人間社会学域国際学類 4年 笠井賀織（チューター）

今年度はチューターとして、アンコール遺跡整備公団のインターンシップに参加させていただきました。8人の学生を連れていくということで出国前は緊張していましたが、明るくしっかりした参加学生たちのおかげで、非常に有意義な2週間で過ごすことができました。

チューターとしての主な仕事は、参加学生たちの業務・生活の補助でした。毎朝、業務前と業務後に簡単なミーティングを行い、学生たちが体調を崩していないかを確認しました。業務の際には、各グループがどこに行くのか、何時に帰ってくるのか、誰と一緒に行動するのか、などを把握し、万が一のために備えていました。1日の終わりには、学生たちの行動を記録しました。

業務についての例年との大きな違いは、公団本部が私たちの滞在するホテルから遠くなったということです。そのため例年のように、ホテルから全員で本部に向かい、本部で解散するという形式をとらず、公団の方が直接ホテルに迎えに来てくださり、各自視察に向かう形式をとりました。今年度は、すべてのグループがまとまって行動することが多かったのですが、別々に行動する際は、朝の出発時間や到着時間、到着場所が異なるなど、複雑であったので、学生たちと密に連絡をとるように心がけました。

また、昨年の業務外の経験を今年の参加学生たちに伝えることも重要な仕事の一つでした。食事、買い物、スポーツなど、過去の先輩方から引き継いできた情報を伝えられたかな、と思います。学生たちの、業務とはまた別のいきいきとした、リフレッシュした姿をみることができました。街で出会う現地の人たちも笑顔であふれていて、私たちを癒してくれました。

チューターの仕事をしつつも、学生たちに同行して、今年度も様々なところを視察させていただきました。昨年度、私は北バイチームにお世話になって業務に参加しました。その時に私たちが提案した、バイにボート乗り場を設置して、観光客を誘致するという提案が実現されていました(写真1)。インターンシップの成果を、この目で確かめることができた感動と、実現してくださったアプサラ公団のみなさんに対する感謝の気持ちでいっぱいになりました。観光客が遺跡に偏るのではなく、



写真1. ボート乗り場の看板

このような他の観光施設に誘致することで、遺跡内の混雑を回避していただけたらもっと魅力的な観光地になるのではないかと、思います。また、北バライの中心にある、ニャックポアン寺院が、私のお気に入りの寺院であるのですが、その寺院に向かう橋からの景観が変化していました。昨年、橋から見える植物と水のコントラストが素敵だなと感じていたのですが、多くの植物が枯れてしまっていました。水を今までよりも多く入れてしまったことで植物が育たなくなってしまうとのことでした。観光地であるので、景観を保つことは非常に重要であると感じました。

また、昨年訪れたルン・タ・エク・エコビレッジでも、多くの変化がみられました。昨年のインターンシップ時には実施予定に留まっていたホームステイが開始されており、他にも、ゲストハウスのようなものが建設されていたり、カンボジア人が大好きなバレーボールのコートが設置されていたりしました。実際、村の立地が悪いことなどから、人はさほど増えていないように感じられましたが、家も増えていたので未来がある村であると感じました。

今回の2週間の滞在の中で、体調を崩してしまった学生や、解決したもののホテルで盗難にあった学生がいました。異国でおきたハプニングにうまく対応できず、塚脇先生やドライバーのペンさんをはじめ、多くの方に支えていただきました。盗難が起こってしまったという事実によって、私も含め学生たちの気持ちは落ち込みましたが、公団の副總裁のプッサンまでもが駆けつけてくださり、私たちは本当に恵まれた環境でインターンシップを行えているのだな、と再確認することができました。それと同時に、昨年度の参加の際には、カンボジアの良い部分ばかり見ていたのだと実感しました。カンボジアは素敵な国であるという私の見方は変わりませんが、貧しい国が抱える問題は多いのだと、再確認することとなりました。

結果的には、私も含め参加学生全員、笑顔でインターンシップを終えることができました。体調を崩した学生も、早く業務に復帰したいという一心で、すさまじい回復力をみせていました。全員が業務に積極的で、非常に好奇心旺盛で、公団の方も学生たちの熱意に応えてくださいました。このインターンシップで、アプサラ公団の業務のことはじめ、アンコール世界遺産やカンボジアという国についてなど、本当に多くのことを学べたのではないかと思います。私自身も今回の参加で、学生たちの業務時など、昨年よりも多くの公団の方と接する機会を頂き、非常に多くのことを吸収することができました。

カンボジアで出会う人はみな、本当にあたたかくて、魅力的な人ばかりです(写真2)。お別れ会では、公団の方からの「去年みたいに泣くんじゃないよ!」という冷やかしにもあっさり負けて、真っ先に泣い



写真2. お別れ会の準備

てしまいました。それだけカンボジアで出会った人たちとの思い出は、私の中でかけがえのないものになっているのだと思います。私は、今回のカンボジア訪問を最後にするつもりはありません。私の大好きな国を友人や家族にも知ってもらいたいと思っています。そして 2 度のインターンシップで培ったアンコール世界遺産についての知識を披露し、お世話になったカンボジアの人たちを紹介したいと考えています。

5. 埼玉大学の海外フィールド実習報告

1) 金沢大学のインターンシップと埼玉大学のフィールド実習

埼玉大学教育学部・准教授 荒木祐二

金沢大学の海外インターンシップに参加するのは今回で3度目となる。金沢大学の取組みを模範として、埼玉大学でもいずれは同様のインターンシップ、あるいはフィールドスタディを実現させたいと考えている。この度は、埼玉大学教育学部の大山央人（学部4年）が同行し、金沢大学のインターンシップのサポートを兼ねたフィールド実習を実施した。以下に、本年度の活動を振り返る。

私と大山が合流したのは、インターンシップ業務が開始された2日後の朝だった。参加学生たちはまだ業務に順応できていないだろうと思っていたが、彼らは公団職員たちとの打合わせを段取りよく済ませ、バイクの後ろに乗って颯爽と現場へ向かっていった（写真1）。わずか1日足らずの業務を経験しただけですでに公団職員らと打ち解け、主体的に活動に取り組んでいる様子から、学生たちの目的意識の高さがうかがえた。渡航前と現地到着後のガイダンスが奏功したのだろう。本年度の参加学生は、控えめな男子と快活な女子とのコントラストが実に鮮明で、それが強く印象に残っている。また、学生たちの意欲と食欲には、例年通りかそれ以上のものを感じた。



写真1. 公団職員とバイクに乗って出発

一方で、チューターの活躍は、本年度も参加学生の安全確保に欠かせなかった。チューターを務めた笠井賀織さんは、昨年のインターンシップに参加した経験を生かして、初めてカンボジアを訪れた学生たちの多様な要求を見事にさばっていた（写真2）。彼女の謙虚な性格から、はじめは自信がないようにも見受けられたが、日を増すごとに頼れる存在になっていった。笠井さんの朗らかな対応によって、学生たちの心理的負担は大いに和らいだことだろう。また、笠井さん自身もチューターとしてかかわったことで、昨年とは違った視点からインターンシップをみることができ、多くを学んだようである。



写真2. チューターの笠井さん（右）

また、本インターンシップにかかわって毎年感じることだが、塚脇氏の学生に対する気

配りと安全への配慮には本年度も感心するばかりであった。学生の質問には丁寧かつ的確に回答し、学生の行動を見通したうえで要求を柔軟に受け入れていた(写真3)。さらに、本年度からアンコール遺跡整備公団の事務所が、市内から 20 km も離れた場所へ移転した課題に対しても、インターンシップに影響が出ないように事前に支援体制を整えていた。学生が腹痛や発熱などの体調不良をうったえれば、すぐに休ませ



写真3. 学生の質問に答える塚脇氏(左)

て経過を見守り、盗難被害が発生した際には公団副総裁の Peou 氏と運転手の Pheng 氏の協力を得て警察に連絡し、迅速に対処した。これまでのインターンシップの成功は、周到的な準備と想定外の事態にも対処できる管理体制の確立に裏付けられている。以前、塚脇氏から、「予期しないことと、予期したくないことが起こると予期しておくことを心掛けている」とうかがったことがある。この姿勢を今後も見習っていきたい。

さて、本インターンシップの傍ら、埼玉大学チームは、アンコール遺跡内の水域(アンコールワット環濠と北バライ)においてフィールド調査を実施した(写真4)。アンコール遺跡地域では、急激な観光地化に伴う水質汚濁が懸念されている。この課題解決に向けて、水生植生の管理によって水質の安定を図るための基礎資料を収集することが、今回の調査のねらいである。埼玉大学のフィールド実習はまだ試行錯誤の段階にある。昨年のように教育施設や一般家庭を訪問するカンボジアの教育事情の視察に加え、本年のような環境調査も視野に入れて、海外フィールドスタディをより効果的に実現するための可能性を探っていきたい。なお、今回参加した大山は大学院への進学を決めている。彼の研究の発展を見据え、フィールド調査は今後も継続したいと考えている。



写真4. 北バライにおけるフィールド実習

インターンシップは本年で 5 年目を迎え、事前準備から実施、予期せぬ事態への対処に至るまでの一連の工程が確立し、活動全体が醸成されてきたように見える。公団職員たちも、毎年の恒例行事として参加学生たちを快く受け入れ、回を重ねるごとに頼もしくなっている。インターンシップ参加者と公団職員との交流会においては、互いの絆がより強まったことを感じつつ、埼玉大学の存在も公団側に徐々に認知されていることも確認できた。今後も、学生たちの成長を後押しする本活動にかかわらせていただき、同時期に埼玉大学のフィールド実習を継続していけることを願っている。

末筆ながら、この度の渡航でお世話になった塚脇氏をはじめ、公団副総裁の Peou 氏、公団職員たち、その他ご支援いただいた関係各位に心より感謝申し上げます。

2) 海外フィールド実習に参加して

埼玉大学教育学部教員養成課程教科教育コース技術専修 4年 大山央人

今回、金沢大学のアンコール遺跡整備公団インターシップに10日間ほど同行させていただきました。私は、埼玉大学の荒木先生と公団の Sak 氏とともに水質と水生植物の関連性を調べるフィールド実習を行いました（写真1）。滞在中は、今回のインターシップに参加した金沢大学の学生との交流を通じて様々なことを学ぶことができました。また、アンコール遺跡整備公団の記念パーティーにも参加



写真1. フィールド調査

させていただき、公団の方々との交流という貴重な経験を積むことができました。

私が感じたインターシップ全体の印象は、アンコール遺跡整備公団と金沢大学の連携体制がしっかりと整えられており、安心して活動できる環境であることでした。滞在中にトラブルが発生しても、チューターをはじめ金沢大学の塚脇先生が現地の人と連絡を取り、迅速かつ適切に対応されていました。慣れないカンボジアでの活動に学生たちが専念できたのは、このようなバックアップの体制が整えられていたためだと感じました。このような体制を築き上げるためには、塚脇先生のきめ細やかな対応や公団の人たちの協力が欠かせないものだと思います。

今回の私自身が一番の収穫は、学ぶということを再確認できたことでした。それはトンレサップ湖を見学した時でした。トンレサップ湖は本当に湖かと疑うほど大きな湖で、多くの魚や植物が存在し、住民の生活との関わりが強く、雨期と乾期で湖岸線が変化するなど興味の絶えない場所でした（写真2）。ここで、金沢大学の学生から塚脇先生と荒木先生が質問攻めにあう場面がありました。彼らは些細なことも聞き漏らさないように耳を傾けていました。大学の先生が質問攻めにあう光景を目の当たりにして、学生たちの好奇心の強さや貪欲に知識を吸収していく姿勢に感心し、学ぶとはどういうことかを再度考えさせられました。



写真2. トンレサップ湖

また、公団のスタッフとは、英語かカンボジアの母国語であるクメール語でコミュニケーションをとっていました。私は英会話に自信がない状態で今回参加したため、最初は現地の人との会話に苦手意識がありました。多くの学生が私と同じような苦手意識を持ちながらも自ら進んでコミュニケーションをとっていました。しかし、日に日に、彼らの語彙が増えていき、私が帰国する頃には、日本語よりもクメール語や英語の方がすぐ出てくるのではないかと思うぐらいに上達していました。

そして、アンコール遺跡整備公団副総裁の **Hang Peou** 氏と荒木先生、塚脇先生との話し合いの場に参加させていただいた時には、更なる学びの必要性を感じました。話し合いは、アンコール遺跡群の水域について英語で行われました。話の論点は、水域の範囲の広さや未だに整備が不十分であることや管理方法についてでした。私の拙い英語力では、すべての内容を理解することはできませんでした。しかし、文献等で読む文書とは違い、現地の責任者から聞く話は、言葉に重みがありました。公団の作業の難しさや公団の組織の大きさにも驚かされました。公団にはいくつもの部門があり、多くの部門が力を合わせていかなければ遺跡の管理は難しいことを知りました。私の考えていたスケールを超える話に戸惑いつつも、自分の尺度を客観的に見直すよい機会になりました。

10日間という短い期間でしたが、私はこの海外フィールド実習に同行することで貴重な体験をすることができました。日本には当たり前で気づかなかったことや学ぶことについて再確認できたことは、私にとってとても良い経験となりました。

最後に、私の渡航を全面的に支援してくださった荒木先生をはじめ、金沢大学の塚脇先生、金沢大学の学生のみなさん、アンコール遺跡整備公団の方々のお陰で、実りある10日間を過ごせたことを感謝します。今回の経験を今後の人生の糧としていきたいです。

6. 資料

2014年度アンコール遺跡整備公団インターンシップの概要

1. 参加者

(1) インターンシップ学生

河本 麻実 (理工学域環境デザイン学類 都市デザインコース 3年, グループ 1)

千種 麻莉 (人間社会学域国際学類 米英コース 2年, グループ 1)

堀 佐菜子 (理工学域物質化学類 化学コース 3年, グループ 2)

櫻井 香奈 (人間社会学域経済学類 2年, グループ 2)

長谷川 美華 (人間社会学域国際学類 国際社会コース 3年, グループ 3)

外内 都萌 (人間社会学域人文学類 言語文化学コース 3年, グループ 3)

伊藤 圭吾 (人間社会学域法学類 総合法学コース 3年, グループ 4)

板垣 政孝 (人間社会学域国際学類 アジアコース 2年, グループ 4)

(2) チューター

笠井 賀織 (人間社会学域国際学類 国際社会コース 4年)

(3) 連絡教員

塚脇 真二 (環日本海域環境研究センター 教授, 8月22日～9月10日)

(4) 埼玉大学

荒木 祐二 (教育学部 技術教育講座 准教授, 8月26日～9月3日)

大山 央人 (教育学部 教科教育コース技術専修 4年, 8月26日～9月3日)

2. カンボジア側受入機関/責任者

カンボジア国立アンコール遺跡整備公団 (Authority for Protection and Management of Angkor and the Region of Siem Reap, Kingdom of Cambodia) / Hang Peou 副総裁
兼水管理部門長

3. 各グループの担当業務

グループ 1 : ルン・タ・エク エコビレッジの整備事業

グループ 2 : アンコール世界遺産全域の水資源・住民環境整備事業

グループ 3 : 北バライ貯水池の環境保全・観光整備事業

グループ 4 : 西バライ貯水池の環境保全・観光整備事業

4. 全体日程

2月20日 (木) : アンコール遺跡整備公団と打合せ (シエムリアプ)

4月4日 (金) : インターンシップ説明会 (国際学類生対象)

4月10日 (木) : インターンシップ説明会 (全学生対象)

4月17日(木): インターンシップ参加者の募集開始
4月23日(水): 第1回実施委員会(実施概要の確認)
5月19日(月): インターンシップ参加申し込み〆切
5月20日(火): 第2回実施委員会(参加学生の選考会)
5月21日(水): 選考結果を応募学生へ通知
6月4日(水): アンコール遺跡整備公団と打合せ(シェムリアプ)
6月18日(水): 第1回インターンシップ事前説明会
7月9日(水): 第2回インターンシップ事前説明会
8月1日(金): 第3回インターンシップ事前説明会, 前年度参加者との交流会
8月23日(土)~9月7日(日): インターンシップ実施期間(委細は下記)
10月28日(火): インターンシップ報告会(総合教育棟 A1 講義室)
11月14日(金): インターンシップ報告会(国際学類)
1月30日(金): インターンシップ報告書の出版

5. 渡航日程/活動内容等

8月23日(土): 金沢ー(チャーターバス)→中部国際空港ー(OZ121)→仁川空港ー(OZ737)→シェムリアプ
8月24日(日): アンコール遺跡世界遺産公園の見学, 滞在準備など
8月25日(月): インターンシップ始業式・各担当者との打合せ(午前)と業務(午後)
8月26日(火)~8月29日(金): インターンシップ業務に従事
8月30日(土): トンレサップ湖見学(午前), 自由行動(午後), アンコール遺跡整備公団水管理部門設立10周年/インターンシップ実施5周年記念パーティ(夕方)
8月31日(日): バンテアイスレイ遺跡等見学(午前), 自由行動(午後)
9月1日(月)~9月5日(金): インターンシップ業務に従事
9月5日(金): インターンシップ業務(午前),
9月6日(土): Hang Peou 副総裁との面談(午前), インターンシップ5周年記念植樹祭, 公団職員とのバーベキューランチ, シェムリアプー(OZ738)→仁川空港(7日朝着)
9月7日(日): 仁川空港ー(OZ112)→富山空港ー(チャーターバス)→金沢

塚脇真二

2014 年度アンコール遺跡整備公団インターンシップ報告書

2014 年度アンコール遺跡整備公団インターンシップ実施委員会

加藤和夫（人間社会学域国際学類 学類長）

清水邦彦（人間社会学域国際学類 准教授）

辻谷友紀（人間社会系事務部学生課人文・国際担当学務係 主任）

塚脇真二（環日本海域環境研究センター 教授）

発行所	金沢大学人間社会学域国際学類 金沢大学環日本海域環境研究センター 〒920-1192 石川県金沢市角間町 TEL (076) 264-5455 FAX (076) 264-5468
印刷 発行 印刷所	2015 年 1 月 30 日 2015 年 1 月 31 日 前田印刷株式会社 〒924-0004 石川県白山市旭丘 2-16 TEL (076) 274-2225 FAX (076) 274-5223

